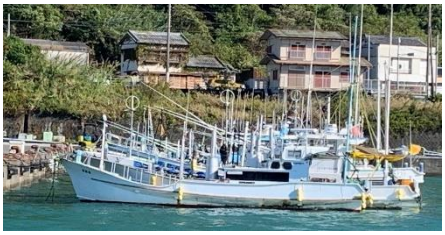
令和５年度 海洋水産資源開発事業＜沿岸釣漁業＞の調査概要



調 査 船：勇栄丸（7.54 トン）
調査期間：令和５年 11 月～令和６年３月
調査海域：高知県室戸沖

本調査の目的

キンメダイ釣り漁業を対象として、高価格帯である大型個体を漁獲しつつ小型個体を取り控えることで、収益性を向上させ、資源を持続的に利用可能な漁獲技術を検証する。また、操業経費の節減、品質（脂質含量）情報の付与による販売価格の向上効果を検証する。

本年度調査の主な成果等

（１）　釣り針の大きさによる漁獲サイズ選択性の検証

現状使用している 19 号から釣り針を大きくすることで大型のキンメダイを選択的に漁獲できるか検証するため、大きさが異なる５種類（16、19、22、25、28 号）の釣り針を使用し（図１）、同日、同漁場にて操業した。２月１日～３月 31 日の 12 日間で、尾叉長 19-41cm のキンメダイを合計 517 個体漁獲した。漁獲したキンメダイのうち 279 個体が尾叉長 22-24cm に集中し、漁獲サイズ選択性を確認できなかった。

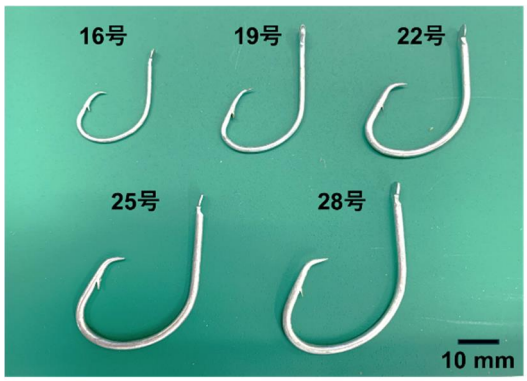


図１　使用した釣り針

（２）操業経費節減に係る調査

本海域で操業するキンメダイ釣り（樽流し）漁業では、１樽に最大 50 本（枝間隔 3 m）の釣針をつけた縦はえ縄仕掛けを１日に最大で 32 樽使用する。漁業者はこの仕掛けを１操業ごとに使い捨てるため、漁具の経費が最も多い操業となっている。そこで１つの仕掛けの釣り針数を 30、40、50 本として操業し、漁獲尾数を比較した。その結果、釣り針数を減らしても漁獲尾数は有意には減少しなかった（分散分析，有意水準 5%）。また仕掛けの釣針の相対的な位置を上部、中部、下部の３つに分けたところ、上部，中部に比べ、下部は漁獲が多く（表１）、上部の漁獲が殆どなかったことから、仕掛け上部の釣り針数を削減することで経費節減が可能であることが示唆された。１ つの仕掛けあたりの釣り針数を通常の 50 本から 30 本にした場合には、年間操業経費の約 18%、約 150 万円の節減効果があると試算できた。

表１　釣り針数別の漁獲尾数

	30本針 漁獲尾数	40本針 漁獲尾数	50本針 漁獲尾数
上部	0	11	19
中部	32	57	53
下部	185	176	250
合計	217	244	322

（３）脂質情報の付与による販売価格の向上効果

漁獲物から 53 個体の脂質含量を調べたが、その値は 0.3-5.9%（平均 1.7%）と低かったため，付加価値情報として利用しなかった。本海域で漁獲されたキンメダイの商材としての品質の評価を得るため、出荷を行っている流通業者と飲食店へサンプル２尾ずつ提供した。その結果、鮮度については高い評価だが、両者ともに脂が乗っていないという評価であった。地元で従来から行っている日帰り操業による高鮮度を売りにした販売戦略が有効であることに加え、さらに高鮮度を維持するための血抜きや神経締めが重要である。脂質含量が低いのは海域の特徴である可能性もあるため、他海域の情報も収集・比較する必要がある。

© Copyright Marine Fisheries Research and Development Center(JAMARC),Japan Fisheries Research and Education Agency All rights reserved
https://www.fra.go.jp/jamarc/